

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2016年度 助成者)

作成日 2016年10月25日

氏名 (フリガナ)	小林 祥子 (コバヤシ アキコ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2016年10月9日(日)～ 10月15日(土)
所属機関名	東邦大学医療センター大橋病院
身分	看護師

今回の研修を通して、アメリカと日本の医療についての違いを多く学ぶことができた。アメリカのどの医療現場・施設にも、「自由」「尊重」「向上」の精神があると感じた。

今回訪問した病院は全てマグネット認可を受けており、医療者は常に向上心を持ち、職位に関係なく、自分の意見を言い合える環境があった。勉強会も多く、学士修得を目指している人が多かった。また、自分達の努力の結果を数値化し、掲示をしていた。改善された成果を目にすることで、医療者の意識も高まるとともに、情報を開示することにより、患者も安心して入院できると感じた。向上心がある医療者をバックアップする環境が整っているからこそ、患者に対しても常に最新の医療を提供できると考えた。

病院や高齢者施設はホテルのような雰囲気、患者も図書館で自分の病気について調べることができ、受付に医療者の名刺が置いてあり、自分で選択して相談ができるという工夫がされていた。入院してくる人種や背景も多様で、多くの宗教イベントが行われており、体格が大きい方にも対応できる救急車や病室にあるクレーン等も設置されていた。中でも印象に残っているのは、CLS (チャイルド・ライフ・スペシャリスト) の話だ。子どもに実際に人形を触ってもらい、今後の治療に対して理解を深めてもらい、不安を軽減する関わりをしていた。また、医療者や清掃員など皆でカンファレンスをし、多方面で情報を共有することで、よりよい医療を提供していることがわかった。

また、オレゴン州は唯一「尊厳死」が認められている州である。POLST という事前の指示書もあり、治療に対して、医療者・患者・家族間で綿密に話し合いをしたうえで、今後について選択できる権利があった。セラピードッグや音楽療法等苦痛を軽減するアプローチ方法も多く、その患者の希望に沿って、その方らしく過ごせるような環境を心がけている工夫が多いと実感した。

看護大学ではより実践に近い環境を作っていた。模擬の患者人形もリアルで、脈拍や呼吸などをPCで設定を操作することもできる上、カメラが何台かセットしており、自分の行動を後で客観的にフィードバックすることが可能であった。私が学生の頃は、実習前は机上の患者を使い、アセスメントすることはしていたが、実習で患者を目の前にして行動することとのギャップを感じていた。実習前に事前に練習することにより、自分の課題がわかるとともに、安心感を持って実習に臨めると感じた。

今回の研修では、日本の病院で勤務している年数や分野が異なる看護師とともに行動できたことも大きかった。積極的に質問する意識が高く、海外の医療に対して興味がある仲間達と出会えたことで、今後の自分の進路についても考えられた本当に貴重な体験だった。この研修に関わってくれた全ての方々に感謝するとともに、私も日々、向上心を持ちながら、患者やその家族に最高の看護が提供できるよう努力をしていきたい。